

中学生でも解ける東大大学院入試問題（１５）

2014-10-12 12:03:55

こんにちは。東久留米市の学習塾塾長です。

TVで解説していましたが、台風19号は、米軍の合同台風警報センターによる5段階の分類で風速67m以上の最強ランクで、スーパー台風ということです。東京には火曜日の午前に接近するようなので十分気を付けましょう。

さて、今回は平成23年度東大大学院工学系研究科システム創成学入試問題です。

問題は、

「ある自然数を2で割れば1余り、3で割れば2余り、4で割れば3余り、5で割れば4余るものとする。このような数のうち、最小のものを求めよ」
です。

小学5年で勉強する最小公倍数を見つける方法を利用すれば、簡単に解くことができます。

つまり、2で割れば1余る数、3で割れば2余る数、4で割れば3余る数、5で割れば4余る数を書き出していき、すべてに共通するものを見つければOKです。

このとき、初めに5で割って4余る数を書き出して、それらの数から4で割って3余る数を選び、次に3で割って2余る数、2で割って1余る数と篩に掛けていくと少しは手間が省けます。

では実際にやってみると、5で割って4余る数は、
4、9、14、19、24、29、34、39、44、49、54、59、64、・・・
です。（答えが59と知っているのので、これだけ書きました）

このなかで4で割って3余る数は、
19、39、59、・・・
です。

さらに、このなかで3で割って2余る数は、
59、・・・

最後に2で割って1余る数は、（実は4で割って3余る数は、2で割って1余る数です）
59、・・・
となり、答えは59と判りました。簡単ですね。

ところが、問題を少し変えると上記の解法では手に負えなくなります。例えば、問題文の「このような数のうち、最小のものを求めよ」を「このような数のうち、小さいものから2番目（または、n番目）のものを求めよ」とすると、多くの数を調べなければなりません。

そこで便利なのが合同式です。

合同式は、 $a \equiv b \pmod{p}$ と表記され、 a を p で割った余りと b を p で割った余りが等しいことを表します。

この合同式の演算では、私たちが慣れ親しんでいる四則演算に相当するものが成り立っています。それらをまとめると、

$a \equiv b \pmod{p}$ 、 $c \equiv d \pmod{p}$ のとき、
加減法： $a \pm b \equiv c \pm d \pmod{p}$
乗法： $a c \equiv b d \pmod{p}$
除法： $k a \equiv k b \pmod{p} \Leftrightarrow a \equiv b \pmod{p}$ （但し、 k と p は互いに素）
や、
 k が整数のとき、
移項： $a + k \equiv b \pmod{p} \Leftrightarrow a \equiv b - k \pmod{p}$
 $a - k \equiv b \pmod{p} \Leftrightarrow a \equiv b + k \pmod{p}$
などです。

この合同式の演算規則を使って問題を解いてみましょう。

求める自然数を N とすると、それぞれの条件は以下になります。

N を 2 で割って 1 余る $\rightarrow N \equiv 1 \pmod{2}$ (1)
 N を 3 で割って 2 余る $\rightarrow N \equiv 2 \pmod{3}$ (2)
 N を 4 で割って 3 余る $\rightarrow N \equiv 3 \pmod{4}$ (3)
 N を 5 で割って 4 余る $\rightarrow N \equiv 4 \pmod{5}$ (4)

ここで、(1) の場合、(3) が成り立ちますから、(2) (3) (4) から N を求めます。

まず、(2) から、
 $N = 3s + 2$ (s は整数) (5)

です。

(5) を (3) に代入すると、
 $3s + 2 \equiv 3 \pmod{4}$

左辺の 2 を移項して、
 $3s \equiv 1 \pmod{4}$

両辺を 3 倍して、
 $9s \equiv 3 \pmod{4} \quad (6)$

左辺 = $4s + 4s + s$
で、 $4s \equiv 0 \pmod{4}$ なので、(6) は、
 $s \equiv 3 \pmod{4}$

これから
 $s = 4t + 3$ (t は整数)
となり、これを (5) に代入すると、
 $N = 3(4t + 3) + 2$
 $= 12t + 11 \quad (7)$

続いて、(7) を (4) に代入すると、
 $12t + 11 \equiv 4 \pmod{5} \quad (8)$

左辺 = $5t + 5t + 2t + 5 + 5 + 1$
で、 $5t \equiv 0 \pmod{5}$ 、 $5 \equiv 0 \pmod{5}$ なので、(8) は、
 $2t + 1 \equiv 4 \pmod{5}$

左辺の 1 を移項して、
 $2t \equiv 3 \pmod{5}$

両辺を 3 倍して、
 $6t \equiv 9 \pmod{5} \quad (9)$

左辺 = $5t + t$ 、右辺 = $5 + 4$ なので、(9) は、
 $t \equiv 4 \pmod{5}$

これから、
 $t = 5u + 4$ (u は整数) (10)

(10) を (7) に代入して、
 $N = 12(5u + 4) + 11$
 $= 60u + 59 \quad (11)$
となります。

(11) に $u = 0$ を代入すると、 $N = 59$ になり、これは各条件に合う数を書き出して求めた答えと一致します。 $u = 1$ の場合は、 $N = 119$ で、これは条件を満たす 2 番目の自然数になります。つまり、 n 番目の自然数は、
 $N = 60n + 59$
と簡単に求めることができました。

このように合同式は便利なので、いろいろな場面で使ってみて、その計算規則をマスターすると強力な武器になると思います。